「特別招待選手」の正体が１７歳の少女、それも一国の王女であった事に、戸惑いを隠せない選手たち。
しかし、彼女の秘めた恐るべき力、そして、

「私は、決して逃げない。相手の命を奪う事からも、自分の命を落とす事からも。
決して逃げずに、恐れずに、これからも私は戦うわ‥‥この拳でね」

この言葉に、選手たちは恐怖するのであった。

しかし、これに反発した選手がいた。
５年前、対戦相手を殺してしまった事がきっかけで、「人を殺さぬ拳」を追求し始めた＜拳聖＞ミスター・ハン。
しかし、アリーナは、彼を「弱くなった」と断じる。「命を奪う事から逃げている」と。

「私より貴方の方が強い‥‥そうおっしゃるのか」
「実際に証明してみる？」

そして、本戦前に、アリーナとハンとの間で、前代未聞の「特別予選」が戦われる事が決まったのである‥‥。

＊

この物語は、後に「不屈の王女殿下（ハイネス）」と呼ばれる、サントハイム聖王国第一王女、アリーナ・フォン・サントハイム殿下の、熱く激しい闘いの記録である！

熱血格闘系・ドラクエ４二次創作小説

「不屈の王女殿下（ハイネス）」

～エニックス「ドラゴンクエスト４・導かれし者たち」第２章より～

第６話　「特別予選」

あさづけ兄貴

「特別予選、だって？ なんだいそりゃ？」

エンドール市街、王城前広場。
エンドール中心部の目抜き通り沿い、文字通り王城の前に設けられた、市民の憩いの場である。

なにか、その一部に、黒山の人だかりが出来ている。
そして、その真ん中に、大きな黒板（ブラックボード）を持ち込み、何かをがなりたてている、二人組の男がいた。

小さな台の上に、やや大柄の男。灰色（グレイ）の作業着のようなつなぎに身を包み、銀色の髪を、まるで何かが爆発したかのように逆立てている。

そして、その傍らで、台の上の男の台詞に絶妙な相づちを打つ、もう一人の男。
先ほどの男と良く似た顔立ち、同じ灰色（グレイ）のつなぎ、同じ銀色の髪‥‥しかし彼は、髪を全て下ろし、黒縁のメガネをかけていた。そのおかげで、雰囲気は、台の上の男とは、かなり違って見えた。

「それがなあロビンソン、王様がスペシャルゲストを呼んでだな。そのゲストと、
本戦に出場する選手の誰かとを戦わせる事にしたらしいんだよ」

既に高く昇ってしまった太陽の下、必要以上に大声で、台の上の男が、ロビンソンと呼ばれたもう一人の男に話しかける。

「スペシャルゲスト！」
「そうなんだよ。しかもそれがな、サントハイムの国のお姫様だっていうじゃないか！
こいつぁ驚きだろう？」

コミカルなやりとりに、観客も引き込まれている。

「ちょっと待ってくれよケント。冗談言っちゃあいけないよ‥‥天下のエンドール武術
大会に、お姫様が出場できるもんかね」

ロビンソンの絶妙なツッコミに、ケントと呼ばれた台の上の男が答える。

「いや、それがなロビンソン。そのお姫様ってのが、見かけはものすごく可愛いんだが

腕っぷしがそりゃあ強いのなんのって。何でも、サントハイムじゃ、襲ってきた熊を楽々投げ飛ばした、って噂なんだよ」

観客から、「ほお‥‥」という驚きの声が漏れる。

もちろん、この辺の逸話は彼らの創作である事は言うまでもない。が、それが完全に誤りかというと、あながちそうとも言えないあたりが、アリーナの恐ろしさである。

「そいつはすごいや。で、そのお姫様は‥‥」

ロビンソンが、後ろの黒板（ブラックボード）を、ばん！ と掌で叩く。

そこには、組み合わせ抽選会の時に王城の大広間（グランドホール）にあったような、大きなトーナメント表が書かれていた。

「‥‥この中の、誰と戦うんだい？」

「そうそう、それなんだよ。それがな、何と‥‥」

わざとらしく、間を置く。

「あのミスター・ハンだって言うじゃないか！」

おお〜っ！ と、観客から、ひときわ大きな驚きの声。

「そ、そりゃ大変じゃないかケント！」

そう言うと、ロビンソンは、手慣れた手つきで、置いてあった布で黒板（ブラックボード）の「ハン」の名前を消し、新たにアリーナと、そして改めてハンの名前を書き加える。

「ミスター・ハンって言えば、世界一の格闘家だ。お姫様はいきなり、そんな超大物と戦うことになったってわけかい」

「そうなんだよ‥‥だけど、もしこの試合で、サントハイムのお姫様が勝つような事があったら、そりゃあ、大変な事になるぜ」

と、ここで一瞬の間。

そして、二人が同時に、観客たちの方を向き、話し始めた。

「と、いうわけで」

「エンドール武術大会、今回は波乱の幕開けだ！」

「これから観戦するぜ！ っていう、羨（うらや）ましいあなたも！」

「チケット買いそびれた！ っていう、ちょっと寂しいあなたも！」

「これさえあれば、データは完璧！」

「おなじみの街頭新聞『エンドール・ニュース』号外、武術大会特集だ！」

「特別定価２ゴールドだよ！ さあ買った買った！」

観客が、我先にと、二人が手に持った分厚い新聞を買おうと、押し寄せた‥‥。

＊

「これでよし‥‥と」
アリーナが、すくっと立ち上がった。

闘技場(コロシアム)地下、出場選手控え室。
いよいよ、前代未聞の特別予選、その開始が目前に迫っていた。

立ち上がったアリーナの、髪。

いつもなら、肩の下で外側にゆったりとカールしているはずの髪が、今は、ピンク色の紐で、一本の太く柔らかい束へとまとめられている。
先ほど、いつもの帽子をクリフトに預けた後、「戦いに邪魔だから」と言って、アリーナが自分で結んだのである。

ちなみに。
結ぶよりも、三つに編んでしまった方が楽なのではないか、と、皆様は思われるかも知れないが‥‥

既に、ブライがそうアリーナに進言しているのである。
が、アリーナは、せっかくの進言を、こう言って、聞こうとしなかったのだ。

「そりゃあね、編んでしまった方が楽なんだけど‥‥編んじゃうとさ、ほら、ミスター・ハンとおんなじ髪型になっちゃうでしょ？

いかにも、アリーナらしい話ではある。

＊

「いつもの髪型もいいですけど、結んだ髪もお似合いですよ、姫様」
アリーナの帽子を両手で持ったクリフトが、少し嬉しそうに、声をかける。

髪をまとめたアリーナには、いつもとは違う魅力がある、と、クリフトは感じていた。

いつもの彼女とは違う、りりしさ。
まるで、戦いの女神が宿ったような。
異国の伝説に残る、戦場を翔(と)ぶ戦乙女(ヴァルキューレ)のような。
普段接している、愛くるしい明るさとは違う、そんな力強い魅力があった。

「そう？　ありがと」
口元に軽く笑みを浮かべて言うと、アリーナは、髪の感触を確かめるように、頭を振ったり、軽くジャンプしたり、そんな動作を何度か繰り返した。
「うん、大丈夫‥‥」

その瞳は、しかし、笑わない。

その光景を、傍らで見やりながら‥‥
ブライは、脳裏に浮かぶ、ある不安がどうしても拭えずにいた。

彼の知る限り‥‥そう、アリーナが格闘技を覚え始めた時から、今回の冒険行に至るまで、常に彼女を見守り続けてきた、その彼の知る限り‥‥
こんな事は、一度もなかったのだ。

そう、彼女が、戦いの前に髪型を気にした事は。

（もしや、姫様‥‥）

普段気にならぬ事が気になってしまうような、そんな精神状態。
そんな精神状態に、彼女がなっていたとするならば。

（相当なプレッシャーを‥‥感じておられるのか）

＊

元来、アリーナは、プレッシャーを「楽しめる」性格の持ち主である。

村の滅亡を賭けた、テンペのカメレオンマン戦。
偽のアリーナ一行の命を救った、フレノール南の洞窟での宝探し。
失われた父王の声を取り戻すために突入した、さえずりの塔(バードソング・タワー)。

彼女はいつの時も、プレッシャーをエネルギーにし、力にすることで、そのような幾多の難局を乗り切ってきたのだ。

しかし、今。
彼女の双肩にかかるのは、自分の過去と同じ「望まぬ結婚」という道をたどろうとしている、ひとりの少女の人生。
彼女を待つのは、彼女がかつて心酔した、世界最強の格闘家‥‥。

さしものアリーナも、そのプレッシャーの強大さに、持ち前の性格を、十二分に発揮できずにいたのである。

（儂の考えが当たっておるならば、プレッシャーを初めて味わう姫様は、その対処法を存じられぬ‥‥いや、それどころか、これがプレッシャーである事すら、自覚されておらぬかも知れぬ）

ブライの頭脳が、恐るべき結論に達しようとしていた。

（このままでは‥‥姫様がプレッシャーに喰われる‥‥！ 何とかせねば‥‥）

そう、ブライが思っていた、その矢先の事であった。

「姫様、もしかして、今、ものすごく緊張してません？」

さらっと言ったのは、クリフトである。

「えっ？」
動きを止め、思わず聞き返すアリーナに、クリフトが続けて言った。
「いえ、なんか姫様、いつになく、ものすごく怖い目をなさっているから‥‥動きもなんか堅いし、よほど緊張なさってるのかな、と思ったもんで」

ははは、と笑いつつ、ぽりぽりと、頭をかく。

「怖い‥‥目を‥‥」
うつむいて、アリーナが、ぼそっと言う。

「いや、あの‥‥」
慌てるクリフト。
「申し訳ありません、お気に障ったのでしたら‥‥」

「そっか‥‥そんな目をしてたのか、私」

そう言って、顔を上げた‥‥
いつものアリーナが、そこにいた。

輝く太陽の表情。

「動きも‥‥やっぱり‥‥堅かったのか‥‥っと」

腕を回し、脚を上げながら、言う。
よどみのない、いつもの動き。

「ふぅ‥‥」
一息ついて、天井を見上げ、噛み締めるように言う。
「そっか。これがプレッシャー、なのね‥‥。こんなの初めて。体が重くて。
集中力も落ちてる感じだし」

「姫様‥‥」
「その通りです。今、姫様が味あわれた重圧。それこそが、我々の苦しむプレッシャー
なのですじゃ」

クリフトに代わり、ブライが、したり顔で言う。

「プレッシャーの怖さは、己の知らないうちに体や心を蝕まれてしまう所。しかし、
それを自覚してしまえば、怖くはありませんぞ。逆に、姫様の力にしてしまえば

良いのです。いつも通りに」

アリーナの心に直接語りかけるような、優しい口調。
仕えるべき王女（プリンセス）の性格を知り尽くした、養育係ならではの彼の言葉が、少しずつ、彼女の緊張をほぐしてゆく。

「お体は、動きますな」
「うん、大丈夫」
「ならば、もう何も心配はございますまい。臆する事はございませぬ、いつも通りに戦われませ」

「ブライ様の言う通りですよ、姫様。せっかくここまで来たんです、後悔なさらないように、思いっっっ切り、姫様のなさりたい戦いをなさってきて下さい」
「思いっきり」を、それこそ思い切り強調しつつ、クリフトも、笑顔で付け加える。
サランの若い娘たちを根こそぎ虜にする、100 万ゴールドの笑顔だ。

「うんっ！」
アリーナも、満面の笑みで答える。
「ありがと。本当にありがと、二人とも」

＊

その時、戦闘台（リングダ）に通じる扉の前から、兵士がアリーナに声をかけた。
「アリーナ姫様。試合開始の時間です。準備はよろしいですか？」

「あ、はーい！」
答えると、アリーナは改めて、ブライとクリフトの方に向き直り、言った。
「じゃ、行ってくるね。‥‥ちゃんと応援するのよ？」

「もちろんですよ。安心して行ってらっしゃい」
「我々は、国王陛下やモニカ姫様と一緒に、試合を見る事になっておりますれば‥‥超特等席で、しっかり見させていただきますぞ」
「‥‥はいはい。じゃね！」

すっかりリラックスした表情で、アリーナは手を振り、扉へと駆け出した。

「お待たせ」
「それでは、扉を開きます」

兵士が取っ手を引くと、ギギギッ‥‥という重そうな音と共に、扉が開いた。
扉の向こうには、暗い回廊が伸びているのが見える。

「では、どうぞ。御武運を」
「ありがと」

兵士の言葉に軽く返事を返し、アリーナは扉をくぐった。

きしむ音を立て、扉が再び閉ざされる。
扉の向こうのアリーナの姿は、もちろん、既に見えない。

＊

「本当に、お強いですね」
クリフトが、ぼそっと言う。
「ん？」
「姫様ですよ。生まれて初めて、体の変調を感じるほどのプレッシャーのさなかに
　叩き込まれたというのに‥‥ほんの少しのアドバイスで、完全に自分を取り戻して
　しまわれた」

「‥‥そうじゃな」
やや間があって、ブライが訊ねた。
「クリフトよ」

「はい？」
「お主は‥‥いつ、姫様のあれがプレッシャーだと分かった？」

先ほどのアリーナの変調。
彼女自身も気付かなかったその変調の原因が「プレッシャー」であることを、ブライもクリフトも、いちはやく看破していたのである。

「いや、私はただ『緊張してらっしゃるな』と思っただけで‥‥」
「それでも良い。いつ、それに気付いた？」

ブライの問いに、クリフトは、ほんの２～３秒ほど考え込むと、答えた。

「髪を結んでらっしゃる時でしょうか。なにか、普段なさらないような、思い詰めた
　目をなさっていたので‥‥」
「ほう」
「最初は私の気のせいかと思ったのですが、その後、体を動かされている時にも、
　いつもより動きが堅いような気がしたんです。あの時も姫様には申し上げましたが」

自分が、今の話相手にとって、いかに重要な事を話しているかに全く気付く素振りもなく、クリフトは言った。

「‥‥そうか」

ブライが短く答えた。
その表情が、緩む。

「たいしたもんじゃの」
「えっ？」
「儂が気付いたのは、その堅い姫様の動きを見た時じゃった。完敗じゃよ」
「そんな‥‥」
少しばつが悪そうに、クリフトが苦笑する。
ここまで人を誉めるブライを、彼自身、初めて見たからであった。

「専属の養育係が、他の者よりも姫様の異常に気付くのが遅れた‥‥これを完敗と
　言わずして何と言う」
「それを言うなら、私も姫様のお付きです。少しはそれらしくなったということ
　でしょうか」
「そういう事にしておくかの」

聖教会（ホーリーチャーチ）の次代のホープ、「100 年に一度の天才」と謳われた若き神官。
王国の生ける伝説、「凍嵐の魔人」と畏れられた大凍術士（フリーザー）。
サントハイムの「未来」と「歴史」を象徴するこの二人が、互いに軽口を叩き合う光景。
そうそう見られるものではない。

「さて、時間に遅れてあの狸めが怒るといかん。我々も行くぞ」

「はい、ブライ様」

二人は、後ろの扉‥‥城から続く扉へ、急ぎ足で向かった‥‥。

クリフトは、未だ気付いていなかった。

自分が、アリーナの養育係であるブライよりも、彼女の異常に気付くのが早かったこと。
それは取りも直さず、自分がブライよりも長い時間、真剣に彼女を見つめている、その結果である事に。

そして、その理由に。
その行動に込められた、自分の想いに。

そう、クリフトは、未だ気付いていなかったのだ。

＊

遥か奥に、光がほの見える。

その光に向け、誰もいない廊下を、彼女は歩いていた。
一歩一歩、確かな足取りで。

もう、さっきのような、プレッシャーが自分の体にのしかかる感じは無い。
かえって、その緊張感が、自分の闘争心を燃え上がらせる。
いつもの感じだ。

心臓が、規則正しく、鼓動（ビート）を刻む。

かつん、かつん。
足音が響く。

出口の光が、だんだん近くなってくる。

胸元に、手をやる。
服の下には、秘石＜大いなる蒼のエンドール（エンドール・グラン・ブルー）＞。
エンドール王家の女性に代々伝えられる、神秘の碧玉（サファイア）。

『私を護ってくれている母と、そして私自身の想いが、今度はきっと、貴方を
　護りますわ』
モニカの言葉。その笑顔。

服の上から、ぎゅっ、と、ペンダントを握り締める。

歩みは止まらない。

『臆する事はございませぬ、いつも通りに戦われませ』
『思いっっっ切り、姫様のなさりたい戦いをなさってきて下さい』

言葉を反芻する。

ブライとクリフト。
心から信頼する二人。
たとえ離れても、彼らは常に、彼女の側にいてくれるのだ。

拳を握り締める。
足音は、乱れない。

もう、出口までわずか。
上り階段が、はっきりと、地上の光で照らされる。

あの上に、戦闘台（リング）がある。
憧れていた、エンドール武術大会の戦闘台（リング）が。

あの上に、アリーナの戦いがある。

迷いは、無い！
戦うのみ！

アリーナは、光の中へと続く上り階段に、足をかけた‥‥。

階段を、一歩一歩、光の中へと登ってゆく。

声が、聞こえる。
多くの人々の歓声が。

陽光が、肌に熱い。

一歩一歩、登ってゆく。
心臓の鼓動が、確実に力強く、感じられる。

ついに最後の一歩を上り、地上へ出る。
そこでアリーナは、見た。

闘技場（コロシアム）のスタンドを埋める、超満員の観客。
どこまでも澄んだ、青い空。
足元に、白い砂。

‥‥そう、それはまさに、彼女が夢見た、武術大会の光景だったのだ。

大歓声が、彼女の体を揺さぶる。

そして、何より。
既に、彼は待っていた。

アリーナの正面に、やや離れて、腕を組んで立つ男。
陽炎(かげろう)に揺らぐ、その姿。

緑色の、ゆったりとした拳法着。
後ろに垂らした、つややかな黒い弁髪。

不敵な笑み。

紛う方なき、地上最強の拳法家。
＜拳聖＞の二つ名を持つ男。

ミスター・ハン！

ついに！　ついに彼が、アリーナと対峙する時が来たのだ！

＊

「さすがだ。あのミスター・ハンに対し、全く見劣りせぬ」

戦闘台(リング)正面、王家と来賓のためにしつらえられた貴賓席(ロイヤルボックス)。

そこに座るエンドール王の、一言である。

「でしょう」
ブライが得意げに答える。
「ですが、感心されるのはまだまだ早いですぞ、陛下」
「と言うと？」
「まだ戦いは始まってはおらぬ、ということです」

クリフトも、横でうなずく。

「戦いが始まる前からそれだけ感心されておっては、実際の姫様の戦いぶりをご覧に
　なったら、感心しっぱなしで息が続きませぬぞ」

そんなやり取りの傍らで、モニカは心配そうな表情で、何も言わず、ただ戦闘台（リング）を見つめていた。
（アリーナ姫様‥‥）

＊

観客席に、見た顔がいる。

（いよいよですね）

青い短衣（チュニック）の優男。
ブーメラン使いのラゴスである。

（見せてもらいましょう‥‥＜拳聖＞、そして姫君（プリンセス）‥‥！）

大会の出場者は、自分以外の試合を、観客席で見る事が特別に許されている。
ラゴスは、それを利用して、この試合を「偵察」に来ていたのだ。

いや、ラゴスだけではない。

（間違いない‥‥相当なレベルの格闘戦になるわ）
（どっちにしろ、俺と当たるとすればまだまだ先だ。楽しませてもらうぞ）

（ただの人間がどこまでやるのか、見ておく価値があるんだな）

ビビアンが。
サイモンが。
ベロリンマンが。

他にも、多くの選手が、この試合を見に来ていた。
それだけの価値が、この試合にある事を、選手たちは知っていたからである。

＊

戦闘台（リング）上。
対峙する二人。

「いよいよ、この時が来た」
ハンが言った。
「私の５年間の、答えが出る時が」

「私の５年間の答えもね」
アリーナが、答えた。
「引っ張り出してあげるわ‥‥５年前の貴方を。私が憧れた貴方を」

二人の間に、闘気が満ちてゆく。
気と気が、ぶつかる。

もちろん、目に見えるものではない。
常人に感じられるものでもない。
しかし、分かる者が見れば、二人のこの気がどれほどの物か、戦慄と共に、理解できる事であろう。

（凄まじい‥‥何と言う気だ）
例えば。
観客席で、ラゴスは、そう思っていた。
（普通の格闘家なら、既に、相手の気に押されてまともに戦えないでしょう‥‥
　それを平然と受け止めているとは‥‥二人とも「普通の格闘家」ではないですね）
冷や汗が、流れ落ちていた。

＊

戦闘台上には、ハンとアリーナ以外、誰もいない。

審判は、戦闘台には上がらない。
スタンドの奥、最上段の特別席から、試合を見つめ、試合開始と終了を告げ、勝敗を宣言するのだ。

それは、裏を返せば、「審判が近くで試合を見なければいけない」ような状況を、この大会が想定していない、ということを意味する。

細かな反則や判定勝ちなど、この大会には存在しない。
あくまで、ＫＯによる完全決着。

強いものが勝つ。
もっとも単純な真理。
それが、この大会のルールの全てであった。

＊

二人は、無言である。

ハンは、右拳を胸の高さで前へ、左拳を丹田へ添え、右半身。
アリーナは、両手を心持ち開き、顔の高さへ。同じく右半身。
両者、独特の構えを取った。

闘気の嵐が、ぶつかり合う。

そして、その時。
闘技場に、魔法で増幅された審判の声が、響き渡った！

「ただ今より‥‥」
ラゴスが。

「第３２回‥‥」
ビビアンが。

「エンドール国王杯武闘大会‥‥」
サイモンが。

「特別予選‥‥」
ベロリンマンが。

「ミスター・ハン選手対‥‥」
エンドール王が。

「アリーナ・フォン・サントハイム選手の‥‥」
モニカが。

「時間無制限‥‥」
ブライが。

「一本勝負を‥‥」
クリフトが。

「行います！」
そして、全ての観客が‥‥
この歴史に残る戦いを目にする瞬間がやって来たのだ！

沸き立つ観客席！
その声援に押され、審判が続けて、宣言した！

「試合開始（ファイト）！」

＊

そして、その瞬間。
アリーナが駆けた！

「ぬっ！」
ハンが叫ぶ！

わずか２～３歩の疾走(ダッシュ)で勢いに乗ると、そのまま右足で地を蹴り、体を前のめりに倒す！

アリーナの体が、左足を伸ばしたまま、まるで空中を転がるかの如く、ハンに向けて一直線に飛ぶ！

いきなりの空中前転！

‥‥いや、ただの前転ではない！
遠心力の付いたアリーナの左踵(かかと)が、タイミングを合わせ、振り下ろされたのだ！

狙いはひとつ、ハンの脳天！
「ヤアッ！」

「前転蹴(ニールキック)り！」
観客席のサイモンが、思わず身を乗り出す！

斧のように、ハンの頭を割らんと迫るアリーナの踵！

並の格闘家なら、何が起きたか認識する前に倒されてしまうであろう、電光石火の大技。
しかし、偉大なる＜拳聖＞は、これに反応した！

「ぬおおっ！」
両手をクロスし、頭上へ！。

ガシィッ！

ハンの腰がわずかに落ち、衝撃を吸収する！
アリーナの足首を、両拳の背でしっかりホールドする！

「受け止めた‥‥！」
呟いた王に、ブライが言った。
「まだまだ。これからですぞ、驚くのは」

大技の後には、崩れた体勢だけが残る。

（この足を‥‥どうしてくれよう）
そう、ハンが思った時。

アリーナが、にやりと笑った。
そして、次の瞬間、アリーナの行動は、ハンの予想を超えていた！

アリーナは、右足を伸ばしたのだ！
そして、その足の先には、ハンの前額部！

ドカァッ！

「ぐあっ！」
顔面にアリーナの足を受け、ハンは後方に吹き飛ばされた！
そのまま、仰向けに倒れる！

蹴りの反動を利用し、アリーナは空中でトンボを切り、何事もなかったかのように、すたっと着地した。

「凄ぇ‥‥」
「見えねえ‥‥速過ぎる！」
「何だったんだ、今のは！」

闘技場（コロシアム）中が、驚愕する！

あまりに高速の奇襲！
あまりに鮮やかな、空中前転蹴りからの二段攻撃！

「アリーナ姫様‥‥」
モニカは、驚きと嬉しさの混じった表情。

「いかがですかな。あれが、我々の姫様‥‥アリーナ・フォン・サントハイム殿下の力ですじゃ」
自信満々の口調のブライの言葉に、しかし王は、答える事ができなかった。
口を半開きにしたまま、ただ彼は、戦闘台（リング）を見つめていたのである。

＊

しかし、それにしても、この光景を一体誰が、事前に想像できたであろうか。

世界最強の＜拳聖＞が、大の字にのされ、倒れている。
そして、それを見下ろす、１７歳の少女。

格闘家としては全く無名の、サントハイムの王女が、しかし今、現実に、超高速の奇襲で、ハンを地に伏させてしまったのだ。

その恐るべき王女は、ハンを見下ろしたまま、自信たっぷりに‥‥半ば「傲然」とも取られかねない口調で、言い放った。

「今のは、ほんの挨拶がわり‥‥さあ、続きをやりましょ、ミスター・ハン」

（つづく）

＜次回予告＞

突然の奇襲で、＜拳聖＞ハンを地に伏させたアリーナ！
平静を取り戻したハンに、しかしアリーナは一歩も怯まずに立ち向かうのだった！

「不屈の王女殿下(ハイネス)」第７話　「王女(プリンセス)、躍(おど)る」

‥‥その力がもたらすのは、驚きと熱狂‥‥！